

研究・調査報告書

報告書番号	担当
329	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and cancers of the oral cavity and pharynx from 1988 to 2009: an update. アルコール消費量、2009年1988年から口腔および咽頭のがん：アップデート	
執筆者	
Goldstein BY, Chang SC, Hashibe M, La Vecchia C, Zhang ZF.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Eur J Cancer Prev. 2010 Nov;19(6):431-65.	
キーワード	
アルコール摂取、新生物、口腔、咽頭	
要旨	
<p>口腔および咽頭のがんに対するアルコール摂取の発がん性に関するエビデンスは、1988年の International Agency for Research on Cancer Monograph 44 において十分存在するとみなされていた。我々は、1988年から2009年の間に公表されたコホート研究とケースコントロール研究に基づいて、ヒトにおけるアルコール摂取と口腔咽頭癌リスクとの関連についてのエビデンスを評価した。</p> <p>異なるデザインで、また様々な集団で実施された疫学的研究から得られた多くのエビデンスにおいて、一貫して、アルコール消費量は口腔咽頭癌のリスクの増加と強く関連していた。喫煙およびその他の潜在的な交絡因子の調整後、60 g/日以上（または4ドリンク/日以上）の飲酒の相対リスクは3.2から9.2であった。飲酒の程度との強い用量反応関係も多くの研究で報告されていた。しかしながら、アルコールの使用期間について明らかな関連を認めた報告はなかった。約10～15年の禁酒によりアルコール依存症者のリスクは非飲酒者と同程度となっていた。非喫煙者を対象とした20以上の研究においても同様の結果が報告されていた。概して、各集団においてもっともよくみられるアルコール摂取パターンが、最大のリスク増加と関連していた。アルコールとタバコ双方の暴露に関する多くの研究において、両者の大きな相乗効果が示されていた。</p>	